

日本近世初期における渡来朝鮮人の研究：加賀藩を中心に

著者	鶴園 裕, 笠井 純一, 中野 節子, 片倉 穰
著者別表示	Tsuruzono Yutaka, Kasai Junichi, Nakano Setsuko, Katakura Minoru
雑誌名	平成2(1990)年度 科学研究費補助金 一般研究(B) 研究成果報告書
ページ	200p.+ Appendix document 22p.
発行年	1991-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/45832



伊藤莘野著『正徳和韓唱酬録』

片 倉 樓

一

加賀藩の儒者伊藤莘野(祐之、莘野は号、一六八一—一七三六)の『正徳和韓唱酬録』は、正徳元(一七一)年に渡来した朝鮮通信使の製述官李東郭(磧、東郭は号)らと莘野とが、大坂から江戸までの往還において詩の唱和を繰り返し、かつ、互いに筆語唱酬を交わした状況を具体的に著録した書であり、加賀藩の学者と通信使一行の学問的・文化的交流の一斑をうかがうにたる、きわめて貴重な文献である。この書は金沢市立図書館に所蔵されており、他の所蔵機関にはその所在を確認し得ず、往時、松田甲氏が「正徳朝鮮信使と加賀の学者」(『続日鮮史話』第一編、朝鮮総督府、一九三二、復刻、原書房、一九七六)のなかで言及された以外に、その構成や内容について詳細に紹介されたことがなかったものである。

前稿「黒本稼堂筆『朝鮮李東郭書 観文堂額由来記』双巻」(『こだま』第八五号、一九八七年四月一日)において、筆者らは、かつて黒本稼堂(植、稼堂は号)翁が『和韓唱和録』(現存本の題名は『正徳和韓唱酬録』)を披見し、当時、池善書店の店頭に掲げられていた看板「観文堂」の三大字が、実は莘野の懇請に応えた東郭の揮毫に成るものであるという新史実を発見したことを紹介したが、

その際、当の書の内容とか価値に関してはいっさい触れなかった。ここに新たに稿を起し、久しく取り上げられることのなかった『正徳和韓唱酬録』につき若干の解説を加え、あわせて他書との概括的な比較照合を行ない、今後、加賀藩政期における日朝善隣友好の歴史を考察するための一つの縁にしたいと思う。

二

現存する『正徳和韓唱酬録』(二冊、写本)は、半紙判袋綴(縦24・2cm、横16・8cm)、縹色表紙(後補か)、墨付三二丁(扉を含む)で、『南海唱和録』(七丁、巻首扉一葉、正徳五(一七一五)年に莘野が泉州の唐金梅所、紀州の祇園南海と唱和した詩などを載せたもの)と題する書と合綴の体裁をとっている。両書は同筆だが、いずれも筆者自筆のものではなく、某氏による伝写本である。元来、上記二書が別本であったことは論を俟たない。所々に虫食い跡が見ずる。

まず、縹色表紙の題簽に「正徳和韓唱酬録」と書され、右肩に金沢市立図書館の分類番号(S944)を記した白い貼紙が、その下に「貴重書」と印した濃紺の貼紙が付せられている。見返しの左下には別筆で「珍書 他ニナシ」の墨書がある。これは後日、何某かが

この書の貴重な価値を強調したため認めためたものであろう。

次に、扉(本来の表紙)には、『正徳吟韓唱酬録』の題がみえる。

この書体は本文の書体と合致するが、表紙の題簽のそれとは異なる。扉の右肩にも分類番号の貼紙があり、その下に同じく「貴重書」の紙片が貼布され、さらにその下に「金沢市立図書館蔵書」の朱印が捺されている。この題においては、「和」の古字「味」が用いられたが、こうした例は、合綴の書『南海唱和録』の表題と本文中の何か所、都合二か所に見付けることができる。

本文第一丁を開けると、最初に首題「正徳和韓唱酬録」が書かれ、その左一行下に「加州伊藤斎宮」がみえ、この書の著者が辛野であることを明記する。そして、その首題の下に「南圃書屋太田」の押印が入っており、これが、もと太田南圃(敬太郎)氏の所蔵にかかる書であったことが知られる。さらに、第三行目の上辺りに「大札記念 金沢市立図書館記」の朱印も捺されている。金沢市立図書館の目録カードによると、これを金沢の石井書店より購入した旨が記され、同図書館への受入れ整理の日付が昭和二十一年(一九四六)年三月十日となっている。

本書の行格つまり文字の排列状態(字詰)は、半丁ごとに九行、毎行一六字を標準とし、細字双行に記された辛野の自注が所々に書き込まれている。全巻を通じて軽快な筆致で書写されたが、文中、見せ消その他の方法で訂正が施され、後述のごとく、誤字や脱字なども見受けられる。後半部に「呂祐吉、慶運、丁好寛ノ誤り(松田)」という正誤を示した張り紙があるが、これはかつて、松田氏が論文をまとめる過程で本書を閲読された証左であり、まことに興味深い。

最後に、末丁の中央上部に「正徳和朝唱酬録」と書され、裏表紙の裏張りに「2516.21.3.10 大札記念 金沢市立図書館」の印紙が付してある。

本書には、跋文・序文または奥書が皆無ゆえ、この書自体によってその成立年月を確定することは困難である。『国書総目録』では、この書の成るを正徳元年とし、『加能郷土辞彙』による、とあるが、『加能郷土辞彙』が正徳元年に書成ると断定したわけではない。ところが松田氏の論稿には、辛野の門人不破梅閑(篤敬)が元文紀(元丙辰(二七三六)秋八月壬申に刻した墓碑銘(野田山、筆者未見)が掲げられ、そのなかに「正徳辛卯、韓人來聘、會僧祖縁奉官命一償之、先生与祖縁善、乃從之選近朝人於撰武之間、唱酬若干、壬辰北帰、以其所作之詩及筆語数条、更写以進故君侯、侯嘉之」とあり、当地の諸文献、たとえば『加能越書籍一覽』巻一七、詩文類、白雪樓集、『三州遺事』中編、巻四、伊藤辛野、及び『燕台風雅』巻六、学士伝、伊藤由貞の各項は、こぞっておそらく梅閑の銘文に従い、辛野の帰藩を正徳二年のこととし、そして同年、藩主前田綱紀に対し、改めて浄書した書を献呈したと述べている。少なくとも野田山の碑文による限り、正徳元年臘月(陰曆十二月、以下、月は陰曆で示す)十八日に大坂の淀河口で通信使一行を見送った辛野は、翌正徳二年に帰藩し、旅中に書き留めていた覚え書き、あるいは草稿の類に手を加え、体裁を整え、浄書し、これを綱紀に献呈したということである。この藩主への、おそらく完備された、献呈本は、残念ながら杳として行方不明であり、したがって現存本

は、この献呈本の原本が伝写されたものであろう。なお綱紀は、正徳二年七月十五日に参勤の途に就いたから、藩主への本書献呈は、幸野が同年某月に帰藩してから、遅くとも七月中旬までの間であったという推定が成り立つのではなからうか。

三

『正徳和韓唱酬録』は、大坂から江戸、そして江戸から大坂まで、すなわち正徳元年菊秋（九月）の初対面から同年臘月十八日の別離までの往還における、幸野と東郭などとの相互唱和や筆語唱酬を月日順・旅程順に書き付けた書である。本文中には数か所、著者の簡略な解説が挿入され、かつ登場人物についても、著者の自注が随所に書き込まれている。詩の唱和と筆語唱酬は、贈詩と次韻、問（「稟」）と答が各々対応形式で載録されており、相互唱和と問答応酬の妙をうかがうに便利な構成となっている。

本書は、最初に「大阪前録」（現存本はすべて「大阪」なる字で示す）という項目を掲げ、幸野と東郭らとの初対面における相互の通刺、自己紹介の筆語（筆談）から始まり、「辛卯菊秋」の詩の唱和・筆語問答、「西京筆語」を経て、「辛卯陽月上瀚（十月上旬）」の富士山に関する唱和、「辛卯孟冬・初冬（十月）十六日」の武州における幸野の作詩、そして江戸での唱和と筆語を排し、帰途は「大磯駅」「小田（原）駅舎」での唱和と筆語、「辛卯初冬」の清見寺（静岡県清水市）における唱和と筆語を叙す、という順序で書き記されていく。幸野の述べるところによると、彼は、尾州で一行と一旦別れて道を勢州にとり、伊勢詣でを済ませ、京を経て大坂に帰り、大

坂の地で一行と再会した。最後の交流の地となった大坂では、再会（「大阪重逢」）と惜別などの詩の唱和と筆語問答の応酬が「季冬（十二月）十夕」「辛卯臘月上流」「辛卯季冬上流」「辛卯臘月上流」「辛卯臘月十有八日」「辛卯季冬日」の日付などを付して排列されている。

収録された詩の数は、贈詩ならびに次韻などすべてを合わせて五一首に及び、これを詩形別に分類すると、五言絶句四、七言絶句三、五言律詩二、七言律詩一となり、作者別では幸野一八、東郭一六、泛叟六、竜湖五、鏡湖五、平泉一を数え得る。詩の主題は多岐にわたるが、人的交流、友誼、往還の風景、旅情、奉謝が詠ぜられ、同時期の他の唱和集にみられるような露骨な派閥意識はあまり表出されておらず、桑韓唱酬の事実在即した偏頗のない記録としての価値が認められる。筆語において政治問題が論議されなかったことも注目される。

詩または筆語が書中に掲載された人物を調べてみると、通信使側では李東郭が最多登場回数を誇り、これに南泛叟（聖重、従事官書記）、嚴竜湖（漢重、副使道書記）、洪鏡湖（舜衍、正使道書記）、趙平泉（泰億、正使）、奇斗文（斗文は名、嘗百軒と号す、良医）、李花菴（爾芳、写字官）、鄭哨官（幸野は哨官を名と注すが、これは官名であろう）、朴直長（泰信、直長は官名）、金哨官（世珍、幸野によると名は益声、哨官は官名）、洪峻屹（製述官小童）が順次登場し、詩及び筆語などで名のみ記された人物としては、壺谷先生（南菴翼、明曆通信使従事官）、呂祐吉（癡溪、慶長通信使正使）、慶運（七松、同副使）、丁好寛（一翠、同従事官）、雪月堂（李三錫のこと）、李花菴

の父、天和通信使(写字官)、任(任守幹、号は靖庵、副使)、李(李邦彦、号は南岡、従事官)を挙げることができる。これに対し、日本人の側では、もとより著者の詩及び筆語がほとんどあらゆる場面に掲げられたが、筆語などで名のみ登場する人物として、寺田立革(臨川、広島藩儒官)、馬島侯(対馬藩王宗義方)、縁長老(別宗和尚、祖縁上人、相国寺下の慈照院僧、接伴僧)、祇園南海(正郷、紀州藩儒官)、林公父子(林鳳岡《信篤》、林竜洞《信充》、国子祭酒等)、雨森(雨森芳洲《誠清》、対馬藩儒官)、狩野某(画工)、室鳩巢(直清、幕府儒官)、芝岸老師(清見寺僧)、梅嶺(本保長益、賀州の人)、四水(大沢猶興、賀州の人)、玄牧(幸野によると武州の人)、凌新(青地凌新《礼幹》、加賀藩武官)、光峰(画工か、未詳)、霞沼(松浦霞沼《允任》、対馬藩儒官)があり、いろいろな場面・話題のなかで登場する。上記人物のうち儒者は、これを学統別にいえば、当然のこととはいえ、その大多数が幸野と同系統の程朱学に属する。

四

ところで、『正徳和韓唱酬録』は珍書と称せられ、金沢市立図書館では「貴重書」扱いとなっているが、ここでしばらく、他書との比較検討を加えてみよう。

なにはさておき、本書を読むときに必ず参照しなければならないのは、幸野著・平(生駒)直武・源(岡田)信之等編輯『白雪楼集』(全五〇巻・補遺、写本、国立国会図書館蔵、鶴軒文庫)巻一六―一七の部分である。いうまでもなく、『白雪楼集』は、幸野の詩文を収録した大著であるが、その巻一六に「大坂前録」、同じく巻一七に

「大坂後録」と題し、『正徳和韓唱酬録』とほとんど同内容の記録を載録している。両書の異同を示すと、『白雪楼集』のほうがやや詳しく、唱和の詩一九首と筆語問答二か所が新たに増補されており、なかでも幸野が、綱紀の命を受け、東郭に『大明律講解』の印本の有無を質した一問一答は、綱紀の『大明律』文献などに対する深い関心の一端を窺知することができる。きわめて興味をそそる。たぶん『白雪楼集』の当該二巻部分は、幸野自筆の『正徳和韓唱酬録』その他を参照・整理して作成されたのであろう。両書の排列順序は大同小異だが、『白雪楼集』に比し、現存の『正徳和韓唱酬録』にはやや誤字・誤記が目立ち、脱字・脱文や、語の顛倒も見付けられ、作詩者または筆語者の名を当然明記すべき所(一一か所)でその記名を欠くなど、全体の整合性・統一性に少く問題がある点を指摘しなければならない。こうした不備や瑕疵は、幸野の手元に残った自筆の稿本類にみられなかったとはいえなからうが、伝写の過程で不用意に生じたものも少なくないのではなからうか。しかしその一方、『白雪楼集』にはなく、本書にのみ記された語句も、数は多くないが見受けられるので、この点は改めて検討しなければならない。いずれにせよ、本書を解読するためには、『白雪楼集』を必読しなければならない。これとの校合作業が不可欠なのである。

次に重要なのは、雨森芳洲の『編紵風雅集』巻七に収められた数々の詩との比較照合である。『編紵風雅集』は、詩の載録に当たって相互唱酬の形式を採用しなかったこともあって、詩の排列順序にかなりの前後異同が生じたが、それでも幸野の自著に収められた全五十一首のうち、実に三十三首(五絶三、七絶一八、七律一一)に及ぶ多

数の詩が収められ、これとは別に、東郭と鏡湖が辛野に贈った詩二首と、竜湖が辛野に奉じた賦、及び辛野が「東韓諸君」に呈した賦（同書、巻四）が収められ、両書の語句の異同を検討することも含め、あわせてこれを参照する必要がある。

その他の文献では、『鷄林唱和集』巻七、浪華前編に、前記全五一首のうち九首が排列順序を前後逆にした形で収められ、かついちの筆語問答も収められたが、『両東唱和別録』では、同じく全五一首のうち八首が収められ、『燕台風雅』では、わずかに辛野の詩二首（七絶と七律各一首）がみえるにすぎず、『通航一覽』第三、巻一一〇、朝鮮国部八六、筆談唱和等天和度 正徳度にいたっては、平泉の詩一首が収められたにとどまる。朝鮮李朝側の文献、たとえば金頭門等の『東槎録』には、辛野の詩や名はいっさい見当たらない。

要するに、『正徳和韓唱酬録』を考察するためには、いくつかの関連諸文献を参照しなければならないが、とりわけ『白雪楼集』、ついで『編紵風雅集』との比較対照により語句の異同や誤りを正すことが肝要であり、こうした基礎的研究を通してこの書の歴史的価値を、改めて見直すことができる。

五

正徳元年、六代将軍徳川家宣の襲職を賀するため、趙泰億を正使とする通信使一行が来日したが、このとき伊藤辛野（三二歳）は、接待僧祖縁の斡旋で大坂・江戸間を通信使団と同行するという僥倖に恵まれた。『正徳和韓唱酬録』は、その折の国際的文化交流の学問

的一成果である。

現存本はその構成と内容においていささか問題があり、ために『白雪楼集』などの関連文献の参照が必須であるけれども、本書を通じて辛野の、通信使の学者・文人に対する、ひいては朝鮮の学問に対する熱い思いを感じることができる。東郭との唱酬應對における辛野の懇請態度、ときにはあまりに執拗な唱和の要請に対し、相手方の困惑した表情さえ行間から看取できそうである。

この書のなかには、彼我の文化交流の一斑を示す、いくつかの挿話も綴られている。金沢の文化遺産となった「観文堂」三大字の揮毫要請をはじめ、辛野と竜湖・朴直長の間に交わされた諺文問答（のうち大坂で金哨官に諺文の文字を書いてもらった、という）、同じく辛野と朴直長兩人の間に交換された楽浪の楽に関する問答等々は辛野の朝鮮文化に対する好奇の念と関心の強さを物語る。この旅のなかで著者は、朝鮮では胡椒を薬物として重用するという新知見を得たし、道中における東郭との交流は、彼から対馬までの同行延長を誘われるほどに深まった。また通信使たちのなかでは、雨森芳洲の朝鮮語と室鳩巢・祇園南海の詩がとくに好評を博していたことも書き留められ、参考になる記事も少なくない。

予期せぬことではあったが、この解説を草する過程で『白雪楼集』巻三一、吟詠日課第四、享保十五（一七三〇）年七月四日の条を読み、そこに辛野（五〇歳）が花硯と称される硯を家蔵しており、この硯は東郭から贈られた朝鮮紫石の硯（墨池の上下に花片を刻したもの）であり、藩主高覧の榮に浴したことが記されていることを知った。辛野は、東郭から朝鮮製の硯をも贈呈され、これを宝蔵して

いたのであった。

以上、『正徳和韓唱酬録』研究の一助にもなればと考え、若干の蕪辞を連ねたが、小稿を成すに際し、多くの方々のご援助とご協力をいただいた。このたびも、本書が金沢市立図書館に架蔵されていることをはじめ、多々教示を賜った同僚の笠井純一氏に衷心から御礼を申し上げなければならぬ。当文献の複写利用を快諾された金沢市立図書館、その他の文献閲覧につき便宜を図っていただいた尊経閣文庫にも感謝の意を表する。なお筆者は、伊藤幸野の墓・碑文の所在をいまだに突き止めていないが、この間、郷土史家や野田山墓地管理事務所などの方々に教えを請うた。深謝申し上げる。野田山墓地に詳しい中島正之氏は、この碑文を眺めた記憶があるとおられる。春の雪解けを待つて始められる氏の調査に期待する。

〔付記〕近八書房の先代近弥二郎氏は、「野田山墓標の探訪」

（『石川郷土史学云々誌』第三号、一九七〇）において、たまたま太田敬太郎氏の遺稿の一部（筆者未見）を入手し、そのなかに伊藤幸野の墓碑銘が収められていたと述べ、その墓碑銘の全文を掲載されたが、上記論稿中に掲載された碑文には、幸野を華野と記すなど、いくつかの誤りが見受けられる。近氏の、野田山墓地に関する調査結果などはほどなく刊行される由である。

（金沢大学附属図書館『こだま』第八八号、一九八八年一月、および『同』第八九号、同年四月、から転載）